

(2018年7月27日講演)

## 24. 「水産物貿易概略」

株式会社ベニレイ 代表取締役社長 矢野雅之委員

水産物の貿易というテーマで、私見も交えながら、まとめた。

まず、輸出入の概略は整理しておきたいので、資料 P1 の水産物輸入概略になる。財務省の貿易統計によると、2017 年度の輸入実績は 248 万トン、前年からは 10 万トン増加。金額にして 1 兆 7,751 億円で、これも 1,722 億円の増加。平均単価は、歩留まり等もあり、参考までにしていただきたい。後段で出てくるが、輸入数量の推移は国内消費量に対して 50%強をずっと、割合としてはほぼ並行して推移している状況だ。輸入量はどのような推移をしているのかというと、下のグラフになる。2001 年については 382 万トン、1 兆 7,237 億円あった。これが 2017 年度には 248 万トンまで落ち込んでいる。数量にして、ほぼ 3 分の 2 になったという状態だ。ただ、単価の上昇があるので金額としては変わっていない。では、どのような魚を輸入しているのか。1 番は鮭鱒（けいそん）、2 番はエビ、カツオ・マグロはどちらかというところ、刺身マグロが金額的に貢献していると思う。イカ、カニ、タラ類、その他という順序になっている。

資料 P2 は輸出概略である。2017 年度の輸出実績は 60 万トン、前年比で 6 万トン増えている。金額は 2,749 億円、109 億円の増加。平均単価は先ほど出したが、出している魚種からいうと、原魚に近いので単価としてはあまり変わらない。これに対して、後ほど説明するが、政府は農水産品の 1 兆円の輸出目標ということで、水産物に関していうと 3,500 億円が目標になっている。量に関しては輸出数量の暦年を見ると、「でっこみひっこみ」がある。何がいえるのかというと、グラフの見方によるが、一言でいうと行き当たりばったりになっている。量に伴って金額も変動はしている。ポイントとしては計画性なくやっているがゆえに大きく出たり、引っ込んだりしていると思っている。輸出水産物の大きなものとしては、1 番はホタテ、そのあとにサバがきて、ブリ、カツオ・マグロ類という状態である。水産物輸出金額の 2,749 億円のうち、真珠が 360 億であり、この議論の中でそれを含めるのはどうかと思い、真珠はこの中に記載していない。真珠を外してしまうと、今の輸出額は 2,400 億程度しかない。

資料 P3 は水産物消費についてである。日本の消費量は減少しているが、それに対して全世界での消費量は拡大している。結果としてよくいわれているのが買い負けだ。従来、日本が買いにいくと価格影響力が相当あったが、今日では日本の購買低下に伴い、価格影響力は低下している。もう一つ言えるのは、品質管理についてもかなり厳しい日本基準がある。これが購買力の低下に伴って、品質管理に対する影響力も低下してきているという状況だ。下の横線のグラフを見ていただくと、魚介類の日本人 1 人当たりの摂取量が減少し

ている。魚食離れである。ひとえに臭いや残渣（ごんさ）の問題があつて、家庭の主婦が調理をしない、魚の調理は手間が掛かる。量販店の売り場の情報を見ると、世の中で鍋が売れず、フライパンしか調理器具としては売れないような状態になっている。魚の調理を家庭内で行うことがだんだん難しくなっているようだ。もう一つは鶏肉が増えている。価格にも問題があり、正味肉ベースでいうと、水産物に比べて相当安い水準だ。そうすると今度は簡便性の追求が行われ、最終製品にまでしたような形であったり、あるいは中間であっても手間を掛けないように骨を外して、ごみが出ないような形にしていくという状況だ。

日本の国内生産量の推移を見ていただきたい。2000年は573万トンあったところから、2016年には384万トンになって、国内生産量はどんどん減少している。一方で輸入量もピークとしては2002年の674万トンだったものが、2016年には385万トンまで減少している。この数量はFAOのデータなので、財務省の数量基準とは若干異なっている点は含んでほしい。輸出は「でっこみひっこみ」があり、ほぼ変わっていない。国内の消費仕向量、国内でどれだけ消費しているかというところと一目瞭然と右肩にどんどん下がってきた。一方で世界消費はどんどん伸びている。天然の水産資源は9,000万トンで頭打ちの水平飛行になっている。この世界の消費量の上昇を何で補っているかというところ、現状では養殖で補っていることになる。国内生産量が減少している中で、今いわれている輸出で、生産量がどんどん減少しているのに輸出拡大だ。一方で輸入量も減少しているわけで、日本の持っている競争力、トレードに関する競争力はいったいどこになるのかという状況になっている。そうすると、IQ（輸入割当）の水産物もあるが、IQが本当に必要なのかどうなのか、法制度の見直しが抜本的に必要かと考えている。

私は競争力という観点で見て、輸出の主要水産物を幾つかピックアップした。資料P4のホタテの生産量と輸出推移は見ていただいたとおりだ。現状、どういう状況になっているかというところ、輸出が半分以上を占めている。原貝と貝柱になった重量などいろいろあるが、冷凍に3分の1が回って、鮮魚に3分の1が回って、干し貝柱に3分の1が回る。冷凍については中国を中心に輸出が行われている。鮮魚についても一部韓国へ輸出されている。干し貝柱も中国が主体の輸出になっている。本来であれば、日本国内市場が中心であったものが、海外の需要がどんどん増えてきて、結果として国内市場を軽視して、海外市場の影響を受けやすくなって、産業があっふあっふしているという状況だと認識している。

資料P5はサバである。サバについては漁業生産量としては50万トンくらいで推移している。日本の水産物は極めて国内消費を中心に全てが捉えられている。サバは輸出アイテムとして今は脚光を浴びているが、結論から申し上げますと、かつてはイワシがあつて、イワシが大量に捕れていた。その時にそのイワシをどうしたのかというところ、ミールになる部分もあつたけれども、東南アジアの缶詰原料として輸出をしていた。青ものに関していうところ、余剰生産してしまったものの行き場を探して、輸出で対応していたといえる。最近ではサンマの漁も漁獲規制を議論しようとして持ち掛けても、相手にしてもらえないという状況

だ。何が起こるかというところ、サンマを日本人は日本の魚だと思っている。ところが、市場には台湾産サンマなどがスーパーに並べられている。この辺は日本の生産量をどうしていくのかと、輸出に真剣に取り組むのかというところは大きな課題だといえる一つの事例である。

資料 P6 はブリである。ブリについては今、柏木委員から説明のあったノルウェー産と比較して、日本としては胸を張れる養殖魚の一つだと思っている。規模が全然違うけれども、200 万トンに対して、日本のブリは 15 万トンだ。現時点では日本の生産量は世界の 80% 超になっている。輸出は総生産量の 7% 程度だ。ただ、ブリの大きな課題はどこにあるかというと、養殖のブリの原料はハッチェリーから孵化（ふか）させるという状況にはまだなくて、モジャコを捕って養殖を始めているところが一つの課題かなと思っている。あとから追加で申し上げることがある。

資料 P7 はカツオ・マグロである。ここについては輸出アイテムという意味ではカツオを中心に、ビンチョウマグロがある状況だと認識している。カツオについては公海での操業があるので、比較的漁業については国際的な対応ができていてと認識している。日本の消費量が減退の中で、特筆的などころでは刺身マグロ、本マグロの大とろの部分に回っていて、国内ではあまり売れていないという状況だ。この先、どういう形を取ればいいのか、まだ疑問が残っている。

一番熱く語りたいのは資料 P8 の「考察」なのである。トレード（貿易）とは何だということ、A 地点から B 地点へのモノの移動となる。天然水産物は漁場があり、漁獲地があって、そこから消費地に向かっていく。これは競争原理が働いて消費地に向かっていく。養殖水産物については、日本の養殖でいうとブリやウナギ、稚魚の漁獲があるという形で生産地があって、消費地に行く。あるいは養殖最適地という、サーモンについてはまさしくそういうことだと思うが、チリやノルウェーという養殖最適地から消費地へ向かっていく。この中で、天然水産物に競争原理が働くのは事実だが、競争をするためには安定性が当然求められる。そうすると、課題の大きな一つに資源管理が入ってくるだろう。養殖についても稚魚の資源管理があって、また、海面養殖の場合は特に環境の管理が必要になってくるのが大きな課題になってくる。

日本の場合、今日に至っては 1 人当たりの水産物の消費量は減少しているが、基本的には昔から魚食大国である。消費市場が足元にあるところから始まっているのではないか。自給自足が前提になっていたような形で、自給自足の中のルールづくりがあって、それが現状の漁業法になっていると、自分の中では整理している。輸入は買うことになるのでいいが、輸出は競争力が持てるのか、越えなければいけないハードルは山ほどあるだろう。まして、自給自足の中で生産も流通も分業でやっていると品質はばらつく。ノルウェーのサーモンの場合、品質は完全にばらつかず、一定になっている。日本の場合には養殖業であっても品質にばらつきがあるので、流通の過程で選別の手間が出てくる、コストも上昇する、ますます競争力は低下するということが起こっている。格好の例としてノルウェーの

養殖の説明があったので、それと日本の養殖業を対比すると、根本的に違うのは日本の場合は自国の消費市場をベースに全て組み立てられている。ノルウェーの場合は世界を市場と見なしてやっている。輸出については今後本当にやるのであれば、世界に対して日本がどうやってコスト競争力を付けるのか、どうやって安定供給力を付けるのか。産業が官とも一体となってやっていく必要があるのではないか。まさしくノルウェーは全てが一体になってやっている。ところが日本は個別の企業が、個別の努力でしかやっていない。そうすると規模は間違いなく負けるわけだ。規模の優位性は取れないという形になるので、この辺を法の整備と絡み合わせて検討していく必要があるのではないかと考える。

天然が頭打ちになると、この先、日本も養殖業をどうしていくのかということになる。完全養殖というか、そちらにもっと軸足を移してやっていく。その上で競争力を持たせる。私は正確にはつかんでいないが、恐らくノルウェーのアトランのコストと、日本のブリの生産コストを比較すると、1.5倍から2倍の開きがあるのではないかと認識している。ブリに関して、現状で80%程度は日本で養殖をしていることになっているが、海外も需要があるのであればと、アメリカやいろいろな所でブリ類の養殖に目を付け始めている。そのうち、どこが養殖最適地になるか。種苗の開発まで先行されてしまうと、今の段階ではいい商品ではあると認識しているが、将来的にその位置が担保されているものではないと考えていて、早急に手を付ける必要があると思う。簡単ではあるが、以上である。